

[封印],[ラッパ],[鉢]の相互関係に関する考察－2 共通した構成

まず注目できるのは、3シリーズで共通しているのは、「7つ」のうち最初の4つと後の3つを分けて考える必要があるだろうということです。

「封印」シリーズ

最初の4つは「馬」で括られています。

「ラッパ」シリーズ

4つ目過ぎたところで、「災い、災い、地に住む者たちには災いだ！ラッパを吹こうとしている三人のみ使いの吹き鳴らす残りのラッパの音のゆえに」。とあって、まるで前の4つは「災い」はなかったかのように、ここから「災い」宣言があります。

5つ目が過ぎたところで、「一つの災いが過ぎた。見よ、これらのこの後なお二つの災いが来る。」やはりここでも、過ぎた災いは「一つ」であると言われ、後二つの災いとカウントされています。なぜか5番目が1つ目なのです。

6つ目が過ぎたところで、「第二の災いが過ぎた。見よ、第三の災いが速やかに来る。」とあって、このことを三度強調しています。まとめますと

第5のラッパー第1の災い 第6のラッパー第2の災い 第7のラッパー第3の災い

このように『ラッパシリーズ』でも最初の4つと後の3つは別扱いです。

「鉢」シリーズ

鉢の記述だけからは、最初の4つを分けて考える根拠となる記述はみあたりません。

しかし、同じ7つからなる三種類のうち最初の2つが共通し、また、「ラッパ」シリーズと「鉢」との内容の共通点を考えると、同様であると考えられます。

では、どういう区分け（ジャンル分け）になっているのかを次に考察してゆきましょう。

1－4の封印

四種類の 災い（裁き）の手段 すなわち

サタン体制がもたらす災い 及び

神の裁きの手段（神が裁きの手段として、彼らの許すことにより、もたらす手段）



1－4のラッパ（タイトルダイジェスト）

四種類の場所、地 海川 太陽 すなわち地球、海洋、河川、天空（人間の生息域全体）関連する世界を4つの領域で表現し、これに対してサタン体制がもたらす災いの全体的な影響を箇条書きにしたものと考えられる。



1－4の鉢（タイトルダイジェスト）

ラッパの場合と目的や領域は同じ ラッパと違う点は、ターゲットが逆転している。



先ず、最初の4つの封印ですが、すでに「封印」全体が「予告編」であることを確認しました。これは3種類のシリーズ全てに当てはまりますが、最初の4つは、聖書中によく見られる「四」の用法と同じですが、例えば「害をもたらすわたしの四つの裁きの行ない一剣と、飢きんと、害をもたらす野獣と、疫病一がある（エゼキエル14：21）

これは、全ての状況においてもれなく行き渡るための神の裁きの手だて四種類、「四人のみ使いが地の四隅に立ち、地の四方の風をしっかりと押さえている」（啓示6：7）これは、地の四隅、東西南北という四方で、全てをカバーできるもので、どちらも全部、全体を示すものとなります。

従って、「封印」の最初の4つは、7つのうちの全体像、概観図であり、全体的な影響を象徴的な言葉で要約していると言えます。

そして、詳細図として具体的な残り3つが詳述されてゆくという形式です。

そして、このパターンは、「ラッパ」「鉢」にも当てはまります。ですから、実際の出来事は実は3つしかないと言えらると思います。「ラッパ」「鉢」のどちらも、5、6、7に比べると、本当に簡潔に、文字通り箇条書きという扱いです。

もう少し具体的に検証してみましょう。

まず、「封印」の時は「馬」でしたが、「ラッパ」の1－4は「1／3」のキーワードで括られています。（第6ラッパでも1／3は出てきますが）損なわれる1／3は次の通りです。

- 1 地の1／3 樹木の1／3（緑の草木のすべて）
- 2 海の1／3 海の被造物の1／3 船の1／3
- 3 川の1／3 水の1／3（多くの人とその水のために死んだ）
- 4 太陽の1／3 月1／3 星の1／3（昼の1／3、夜の1／3）

ターゲットとなる4種類の場所である、地 海 川 太陽は、すなわち地球、海洋、河川、天空であり、「人間の生息域全体」を4つの領域で表現して、樹木、船などの表現でそれぞれの領域の主要な要素を表しているのでしょう。結果、その全世界の1／3が打撃を受けると言うことを示唆していると言えます。

逆に、文字通り、1から順にこの全てが成就すると解すると、矛盾が生じて来ます。例えば、（啓示8:7）「第一の者がラッパを吹いた。すると、血の混じった、雹と火が生じ、それが地に投げつけられた。すると、地の三分の一が焼きつくされ、樹木の三分の一が焼きつくされ、緑の草木のすべてが焼きつくされた。」

（啓示9:4）「第五のみ使いがラッパを吹いた。…地の草木を、またどんな緑のものも、どんな樹木も損なわないように」

この2つを比べると、第1ラッパで、すでに損なわれている、樹木、草木を第5ラッパの時に「損なわないように」と告げられることとなります。従って、そうした読み方は、意図されていないと言うことを、この2つの聖句は物語っています。

さて、ほとんどは1／3なのに若干の例外があります。「緑の草木は」残らず全部です。そして、苦くされた水の1／3の影響で「多くの人」が死にます。少なくとも1／3以上ということでしょう。

それぞれの語句が実際に何を意味するかを、逐一考慮することはこの論文の目的とはそれますが、1／3に関してだけ少し、思いついたので、触れておきます。

フリタニカ年鑑によると世界の宗教人口比率は、①キリスト教 33% ②イスラム教 21% ③ヒンズー教 13.5% ④無宗教 12% ⑤中国の伝統宗教 6.5% ⑥仏教 6% ⑦その他 10% となっていました。偶然かも知れませんが、キリスト教世界はちょうど世界の1／3です。

これは推測に過ぎませんが、1/3という表現を考える時に、地球の様々な至るところの打撃された部分を集計すると、みなの場合もすべて1/3だったと言うことは考えにくいように思えます。

また、「地」の打撃は地球の1/3のある地域、また「水」の影響は別の地域というのも考えにくいでしょう。やはり、全ては同一の1/3の領域に生じると考えられます。

どう考えても、適当にめくら打ちをした結果や、集計された1/3ではなく、1/3を「占める」特定の部分がターゲットにされたと考えるのが理に適っているように思えます。

さて、この推測が当たっているとすると、「全ての青草」と「苦い水」の影響は、そこだけでは済まず、全世界、また相当な範囲に及ぶことになるということでしょう。

「終わりの日」で何を終わらせるのか、「世（この事物の体制）の終わり」という表現もありますが、終末期のメイン舞台はイスラエルであり、メインターゲットは最後の世界強国と「大バビロン」ですから、1/3もその関わりのある領域であることだけは確かでしょう。

（「大バビロン」については「31 大いなるバビロンの正体を見極める」をご覧ください）

さてすこし横道にそれましたが、次に「鉢」シリーズの1-4に注目してみましょう。

『「7つの鉢」キーワード抜粋』の表をご覧になればすぐに分かりますが、この1-4の注がれる領域と、「ラッパ」の1-4の領域は同じであることが確認できます。

したがって、鉢シリーズの1-4も「人間の生息域全体」に及ぶ影響について述べていると言うことができます。

しかし、領域は同じでも、書かれている内容に違いが見られます。

「ラッパ」に出て来る表現は、破壊、苦、死ですが、「鉢」の方は違う観点から書かれています。つまり全体的な記述は「報復、返報」です。

「彼らは聖なる者と預言者たちの血を注ぎ出しましたが、あなたは彼らに血を与えて飲ませました。彼らはそうされるに値するのです…全能者なるエホバ神、あなたの司法上の決定は真実で義にかなっています」（啓示 16:6,7）

つまり同じ領域内で、ターゲットが逆転していることが分かります。これは第3番目の「鉢」の災厄に関する記述ですが、興味深いのは「川と水のわき出るところ」を「彼ら」と呼び、聖徒たちに対する血の罪があるとし、この災厄はその罪に対する司法上の裁きであるとしています。この表現からこの川が「大バビロン」を表していることが分かります。

「その女が聖なる者たちの血とイエスの証人たちの血に酔っている…その裁きは真実で義にかなっているからである。[神]は、その淫行によって地を腐敗させた大娼婦に裁きを執行し、ご自分の奴隷たちの血の復しゅうを彼女の手に対して行なわれた（啓示 17:6 / 19:2）

「ラッパ」の方では、「苦よもぎ」によって「川の水の1/3が苦くなり、多くの人が死んだ」と述べられています。

さて、こうして、第3の「ラッパ」と「鉢」を比較してみて来ますと、一つ目の第2番目の「ラッパ」と「鉢」の「海」に対する記述も、同様のもの、つまり「大バビロン」に関する記述である可能性が強い事が分かってきます。

それで、この両方の第2と第3番目を一緒に考慮して見ましょう。

「第二のみ使いがラッパを吹いた。すると、火で燃える大きな山のようなものが海に投げ込ま

れた。すると、海の三分の一が血になった」

「第二の者がその鉢の中から海に注ぎ出した。すると、それは死人の血のようになり、すべての生きた魂が、しかり、海にあるものが死んだ。」

第三の者がその鉢の中から川と水のわき出るところに注ぎ出した。すると、それらは血になった」(啓示 16:3,4)

「苦よもぎ」については、エレミヤ記に興味深い記述があります。

「それゆえ、万軍のエホバは預言者たちに対してこのように言われた。「いまわたしは彼らに苦よもぎを食べさせる。わたしは彼らに毒の水を飲ませよう。エルサレムの預言者（ヘスライ語：カヌーフア [字義訳：汚染、公害]）たちから、背教が全土に出て行ったからである」。(エレミヤ 23:15)

ここで神はエルサレムの預言者から全土に出た「汚染」に対する報復として、それに対応したもの、すなわち「苦よもぎ」を与えられているとされています。

「ラッパ」の災いを引き起こした者に関してはこう述べられています。

「火で燃える大きな山のようなものが海に投げ込まれた。」(啓示 8:8)

それで、「大バビロン」に落ちてそれを血に変えた「大きな山」は、「背教者」(ヘ語：「カヌーフア」) であると考えられます。

「あなたの見た十本の角、また野獣、これらは娼婦を憎み、荒れ廃れさせて裸にし、その肉を食いつくし、彼女を火で焼き尽くすであろう。」(啓示 17:16)

それで「大きな山」は「背教者」「反キリスト」の権化である、「不法の人」であろうと思われまゝ。「まず背教が来て、不法の人つまり滅びの子が表わし示され…「彼は、すべて神と呼ばれる者また崇敬の対象とされるものに逆らい、自分をその上に高め、こうして神の神殿に座し、自分を神として公に示します」(テサロニケ第二 2:3)

上に引用したエレミヤにある(カヌーフア)と同様の語句が使われている聖句として例えば、箴言 11:9、イザヤ 9:17 (いずれもヘ語：カヌーフア) を、新共同訳は「神を無視する者」と訳しています。」

そして第3のラッパで「ともしびのような星」が落ちます。

「ともしびのように燃える大きな星が天から落ちた。それは川の三分の一と水のわき出るところに落ちた。そして、その星の名は“苦よもぎ”という。」(啓示 8:10,11)

これは次の聖句を連想させます。

「ひとりの強いみ使いが、大きな白石のような石を持ち上げ、それを海に投げ込んで、こう言った。「大いなる都市バビロンはこのように、速い勢いで投げ落とされ…」(啓示 18:21)

それで、川の水が血に変わるとは、大バビロンの教理が、「苦い」「死に至るものであることが暴露される事であり、「ともしびのような星」が落ちるとは「大バビロン」のTOP(つまり教皇)が「女王」の座から引きずり下ろされる事であろうと思われまゝ。